

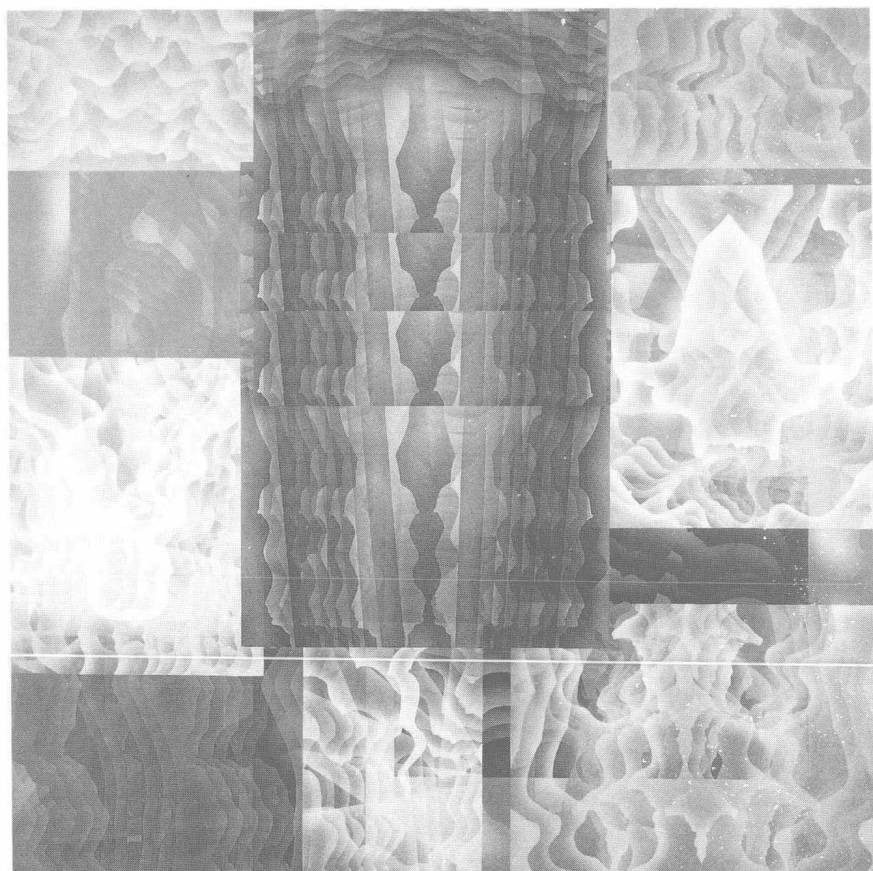
立松和平

水の流浪



立松和平

水の流浪



水の流浪

一九九二年十一月二十五日 初版印刷
一九九二年十一月三十日 初版発行

定価はカバーに表示してあります

著者 立松和平

発行者 宮本裕行

発行所 饑有書林

〒一三三 東京都文京区白山一丁目三〇—三 片桐ビル4F
(電)〇三—三八—四一四一七 (FAX)〇三—三八—四一四一七
印刷・製本 株式会社上野印刷所

© Wahel Tatematsu 1992. Printed in Japan
ISBN4-946477-00-4 C0093

万一落丁、乱丁のあった場合はお取替えいたします。

立松和平(たてまつ・わへい)

一九四七年、栃木県生まれ。早稲田大学政経学部卒。一九七〇年、「自転車」で第一回早稲田文学新人賞を受賞。また長篇小説『遠雷』で野間文芸新人賞を受賞するなど幅広い創作活動をつづけている。

近著に『百雷』『贗南部義民伝』『卯洗い』など数多くの小説、エッセイ集、ルポルタージュなどがある。

目次

誘 水	檻 樓	冬の音楽	酔いどれ草	水の流浪
159	131	99	69	7

千年樹の森

193

後記

228

装画
装幀

みのわ
中島かほる

淳

水の 流浪

水の流浪

波のひとひらひとひらが陽の色を染みこませて赤く眩しく輝いていた。巨大な光の容器だ。遠い雲は燃え、空中に火の柱が立っていた。海面が大きく傾ぎ、上下の定めがつかめない気がしてきた。腐爛した太陽が水の彼方にゆっくりと崩れ落ちていく。赤は徐々に海面から失われて雲に固まり、空は青く静謐に澄み渡る。水は冷えびえとした銀色になって刻一刻黒ずみ、やがてとりとめもない闇のひろがりである。眺望が閉ざされると、血管の中にさざ波を立てているジェットエンジンの振動を感じた。窓から見えるのは、茫々たる闇に浮かんでいる私の顔と、その背後で明りをたたえた機内だけだ。もうひとつの透明な部屋が寄り添って飛んでいるようだった。早口の聞きとりにくい英語でうるさいほど話しかけてきた脇のアメリカ青年は、ワインを飲みながら機内食を食べるや、眠ってしまった。埃をかぶったような艶のない金髪の下で、頬が日焼けして腫れていた。日本のユースホステルや鉄道や食物や言葉や身の安全のことを詳しく聞きたがった。彼の不安は掌にとるようにわかり、私は手帳を走る彼のボールペンにあわせて唇を動かし、地図を書いてやった。旅の最中は考えたこともない地図と地名だ。私の旅は終わったのだな、これから

家に帰るのだなと、今さらながらに思い知らされた。ショートパンツの脚を開いて眠る男のもの毛が鬨のように見えた。よれよれのTシャツを着ていた。こんな格好で十二月の東京に降りるつもりかと思い、私は自分の服装もたいして違っていないことに気づいた。家を出る時身につけていたシャツもジーンズも洗濯をくりかえすうち生地が傷み色が褪め、街の露店でクルタと呼ばれる白い上下のインド服を求めた。ふんわりと柔らかい木綿で、灼熱の大地では木陰にいるように風の通りがよく、驟雨にずぶ濡れになってもすぐ乾いた。そのインド服も土埃や汗を吸って薄汚れ、街にいる時には気にもならなかったが、カルカッタの空港のターミナルに立った時には、我ながらひどくみずばらしく感じられた。足元はゴムゾウリをはいただけの裸足である。ゆず子を買ってくれた革のサンダルは、右も左も土踏まずのところから千切れてしまった。髪も髭ものばし放題だ。取澄ました乗客の中で見るからに異質な私とアメリカ青年とが隣の席になったのは、穢ならしいものを一箇所に隔離しようとする航空会社の係員の意図だとさえ思えた。悪臭もしたかもしれない。食べ物の腐臭やら、小動物の死臭、いろんな人種のかもしだす体臭や、汗や洗濯石鹼や埃を吸った服の日向のにおいが、この数ヵ月で皮膚に染みついた私の体臭だった。私はその体臭を抱き寄せるようにして腕を腹の上に置き、リクライニングシートを倒した。眼を閉じると、隣の男の寝息が心安く感じられた。

どのくらい眠っただろう。ふと目蓋を開いた一瞬、自分がどこにいるかわからず迷った気になった。箱に閉じ込められていた。内部装飾はしてあるが、大きなジュラルミンの箱だ。虚空に

夢のように浮かぶ旅客機の全容を思い描き、その片隅にすわっている貧相な自分の姿を思った。暗黒の中を運ばれていくのだった。耳の奥が痛み、気圧が変化してくるのがわかった。レンズのように歪んだ窓に顔を寄せると、はるか下に明りが散らばっていた。無数の針が上に尖っているようだ。針にむかって旅客機はぐんぐん高度を下げた。禁煙のランプが点き、座席の背凭れを戻すようにとアナウンスがあった。アメリカ青年はベルトについている革の物入れから皺くちやのドル紙幣をだし、柔らかく揉みほぐすように数えていた。闇ドル屋はあるかと彼の声がして、私は顔を左右に振った。圧縮された風が耳から吹き込んでくる。頭の中で小虫が羽撃いているみたいだ。少し気分が悪くなって私は目蓋を重ねた。軽い衝撃が背骨から頭の先にぬけ、上下の揺れがなくなった。闇の彼方に仄明るい波が見えた。眼の高さだった。眠っている巨大な獣の背中のように、海は平穏に呼吸をしていた。滑走路の誘導灯が糸を引いて後にとびのいていく。月光を浴びた芝がしっとりと濡れて見え、金色の波が遠ざかった。ターミナルビルの手前に飛行機が整列していた。尾翼が刃物のように空に切り立っている。つなぎの菜っ葉服を着た男たちが両手を耳にあててならんでいた。旗を振っている男の脇から、何台も連なった車体の低い地虫のようなトラクターが近づいてきた。乗客が一斉に立ち上がった。菜っ葉服の男たちが耳を押さえていた手を放した。私は坐ったまま両腕を頭上にあげて伸びをした。肩の骨を鳴らしながら、東京だ東京だと呟いた。

「あんたの家に泊めてくれないか。一晚でもいい」

アメリカ青年が息ばった声をだした。逡巡したあげくにやっといったらしい様子だ。その言葉を気持の何処かで予想していた私は、考えるふりをして間を置き、肩をすくめた。

「悪いけど、無理だ。俺の家じゃないんだ。俺だっていれてもらえるかどうかわからない」

ノーと彼は口の中に籠らせて立った。通路の列が少しずつ動きだした。笑顔のスチュワーデスに頭を下げられてタラップに立つや、木枯しに吹かれて私は身を縮ませた。冷たく乾いた埃っぽい風に白木綿のインド服をふくらませながら、私は狭い階段を降りた。見上げるばかりの銀色の機体がライトに照らしだされていた。上空で風が苦しそうに軋んだ。千切れるほどに激しくはためくズボンが足に絡んだ。送迎バスに乗るまでに悪寒にとらえられた。バスにはドアがない。心細そうな乗客たちの間で、Tシャツとショートパンツのアメリカ青年がことに見すばらかった。私は乗客たちの視線がちらちらと私に向けられるのに気づいていた。長く伸びた前髪に眼を打たれた。静かなエンジンの音とともにバスは走りだした。空席があったが、私は吊り輪にぶらさがり足踏みをした。脚と腕に鳥肌が立っていた。バスは整然とならんだ建造物のような飛行機を迂回し、ターミナルビルに近づいていった。アメリカ青年が物悲しそうな疲れた眼を私にむけてきた。私はビルの窓を見るふりをして眼をそらした。灰白色の凍った明りをたたえた窓には人影もなかった。

ドアをくぐるたび空気はぬくまってきた。パスポートにスタンプをもらうため列をつくっている時も、ベルトコンベアーから荷物がでてくるのを待つ時も、私はアメリカ青年の視線を感じて

いた。うっかり眼をあわせると、彼はここぞとばかり自分の肩を抱いて同情をひこうとした。東京の冬が寒いのは俺のせいじゃないと、私は叫びだしたい気持だった。私は荷物を軽くするためジーンズやTシャツを旅先で知り合った連中にやってしまった。インド服は快適だったので、薄汚れたジーンズなど持って歩く気はしなかった。十二月の東京の寒さを考えないわけでもなかったが、灼熱の土地では現実感がともなわないのだ。私は自分のリュックを見つけると、片方の肩に担いで税関に向かった。税関吏はリュックを上から撫ぜただけで億劫そうに顎を横に振った。

ロビーに出迎えの人の群れがあった。私は誰とも視線をあわせずに群れの間の通路をぬけた。ゴムゾウリがべたべたと場違いな音をたてていた。床が水をたたえたように人の影を映した。電話機の赤をめざして歩きかけ、途中で思いついて銀行を探した。そこにも列ができていた。じつとしようとしても、私の足は勝手に足踏みをくりかえした。上着の腹のところをめくり、首から下げている布袋のチャックを開いた。伏見稲荷の福財布を改造したバスポート入力で、旅の間肌身離さずにいた。腹にも鳥肌が立っている。布袋からありったけの金を握み、窓口のプラスチック皿にいった。銀行員の白い指が伸びて紙幣だけを摘んだ。私は鼻水を吸った。

公衆電話にも列ができていた。コートを着た男が煙草をくわえたまま十円玉を何枚もいれて長話をしていた。私はコートの背中に向かってくしゃみをした。男はむっとした表情で振り返った。私が睨むと、男は急におどおどして受話器を置いた。私は男のぬくみが残った受話器を握って硬貨をほうりこんだ。指先が番号を覚えていた。

「あ、もしもし、俺です」

相手を確かめもせずに私は叫んだ。抑制がきかずに声は上ずっていた。電話の中であつと息を呑む気配がして静かになった。ゆずちゃんゆずちゃんと遠くで呼ぶ声がした。あんたのいい人よ。私は苦笑して受話器を持ち替えた。鼻先に残った笑いが顔中にひろがってきた。乱暴な足音が聞こえた。自分の息が白かった。

「今、どこ。香港あたり」

荒い息のまじったゆず子の声が耳に響いてきた。私の舌先で笑いがはじけた。

「東京さ。空港」

「なあんだ。国際電話だと思ったから、急いでお風呂からでてきたのに。濡れた身体にガウン羽織ってるの。風邪ひいちゃう」

「これから帰るぜ」

私は少し腹を立てた。まだインドにいる気がした。ぶるっと悪寒が走った。

「おなか空いてるんでしょう。食べる物ないわ。何か食べてきてくれないかしら。空港にレストランあるでしょう」

「金がねえんだ」

「やだあ。そんなに惨めなの」

「乞食と同じさ。飛行機には乗ってきたけどな。インスタントラーメンが食いてえんだ。熱いほ